

古英語の *gān* Old English *gān*

森 基雄
Motoo Mori

要旨

古英語の不規則動詞として分類される *gān* ‘go’ が誕生したのは語形変化上いかなるプロセスによるものなのかは古英語動詞の形態論の最も難解な問題の1つであり、解明されているとはとうてい言えないのであるが、OE *gān* そのものと他の同族言語における例との比較から、まずゲルマン祖語におけるそのベースとして **gai-*、**gǣ-* という形が推定される。そこで本稿では OE *gān* の成り立ちについて論じていくに当たり、以下のような説を取り上げた：(1) Gmc **gǣ-* を出発点としながらも、もう一方の異形とされる **gai-* と見られる形は実は WGmc **gā-* (<Gmc **gǣ-*) + 語幹形成母音 *i* を有する直説法 2、3 人称単数形に基づくとする説 (Voyles)；(2) Gmc **gai-* を反映するものであり、さらにその印欧祖語における起源は希求法であるとする説 (Mottausch)；(3) **gǣn* の thematic 化による **gǣan* に由来し、-an の前位置で *ǣ* > *a* という音変化が起こった結果とする説 (Hogg & Fulk)；(4) IE **ǵhH₁-je-* > Gmc **gaji-*、IE **ǵhH₁-jo-* > Gmc **gaja-* に由来するとする説 (Þórhallsdóttir, Ringe, Müller, Ringe & Taylor)。そしてさらにこれらが見解が抱える問題点について考察することにより、また他のゲルマン語のケースとも比較しながら、OE *gān* という語形の真の姿と背景に迫った。

キーワード：古英語の不規則動詞

1. 古英語と他の同系諸言語との比較からまず見えてくる **gai-* と **gǣ-*

古英語では ‘go’ を意味する動詞として強変化動詞 7 類で長形の *gangan* (OS, OHG *gangan*、OFris *gunga*、ON *ganga*、Go *gaggan* ‘go’、Skt *jaṅghā* ‘Unterschenkel (下腿、すね)’、Lith *žengti* ‘stride (大またで歩く)’) と並んで短形 *gān* が存在した。

古英語と他のゲルマン語において実証される短形の状況については、Brunner (1960-2^o, II: 280f)、Schmidt (1984: 211-213)、Braune & Eggers (1987¹⁴: 306f)、Mottausch (1997: 252f.) 等に従い、次のようにまとめることができるであろう。

古英語：*gān* (現在直説法 2 人称単数 *gæst*、*gäst*、3 人称単数 *gæþ*、*gāþ*)

古サクソン語：*gān* (現在直説法 3 人称単数 *begēd*)

古高地ドイツ語：*gān*、*gēn* (現在直説法 2 人称単数 *gās*、*gās(t)*、*gēs(t)*、*geist*、3 人称単数 *gāt*、*gēt*、*geit*、
希求法ではすべて *ē-* 形 (*gē*、*gēs(t)*、*gēnt*、*gēt*)

古フリジア語：*gān*、*gēn* (現在直説法 3 人称単数 *gēt(h)*、*gēit(h)*)

古ノルド語：gá

クリミアゴート語：geen

2. Voyles の理論を中心に

Brunner (1960-2², II: 280) は、もともと短形は語幹形成母音 IE e/o を伴う thematic な屈折ではなく athematic な屈折に由来するとしている。とりわけゲルマン語派の中でそのことを明確に示していると思われる形は古高地ドイツ語の ā-形で特に現在直説法 1 人称単数で IE *mi を反映する語尾を有する gām であろう。さらにゲルマン語派以外の同族語とされる Skt jahāmi ‘ich verlasse (私は～を後にする、～を見捨てる)’、Gk kikhēmi ‘reach’ もまたそのことを裏付けると思われる例として注目すべきであろう。すなわち OS、OHG、ON ā は IE ē に対応することから、短形は Gmc *gǣ- (<IE *ǵhē- <*ǵheH₁-) に由来し、OHG gām は IE *ǵheH₁mi に由来すると見なせるであろう。OE gān, OS gēn、(現在直説法 3 人称単数)-gād, OHG gēn については Brunner (1960-2², II: 281) は Gmc ai を反映するものと見なす。またクリミアゴート語形 geen については Seebold (1970: 216)、Voyles (1992: 268) は Gmc *gǣ- に由来するのではないかとしている。

OE gān について Voyles (1992: 268) は、OE ā は Gmc ai の反映に等しいにもかかわらず、語根母音は古高地ドイツ語と同様 IE ē を出発点とし、athematic な屈折に由来すると考える。すなわち Voyles は 3 人称単数 gǣþ、gāþ のうち、gǣþ は *gai- + ip > *gā-ip > (i-ウムラウトにより) gǣþ という音過程の結果であり、gāþ は 2、3 人称単数以外の、強変化動詞においてしばしば見られるように i-ウムラウトとは無関係な形に対する類推の結果であるという一般的な見方はせず、gǣþ は IE *ǵhēti > WGmc *gāþ > OE gǣþ という音過程によるものであるとしており、ǣ を ā の i-ウムラウトの結果とは見なさない。これに対し gāþ は WGmc *gāþ が thematic 化されて *gāip となり、āi は既存の WGmc ai と融合した結果 OE gāþ となったとしている。そうすると、不定詞 gān の ā もこの (āi > ai >) ā を導入した形に由来するということになる。そして確かにもし不定詞が athematic な Gmc *gǣn- からそのまま発達していたならば、それは OE *gōn となってしまっていたのではないだろうか。このように OE -þ は thematic な IE *-eti (>POE *-ip) ではなく athematic な IE *-ti に由来するという前提に立つならば、*-ti の末尾の i は ā > ǣ の i-ウムラウトに先立って消失していたということになる。ただし athematic な IE *-ti が非常に早期に i-ウムラウトを引き起こしたと考えられる確かな例がただ 1 つ存在する。それは OE is ‘is’ (OS is, OHG ist) < IE *esti (Gk esti) である。

しかし OE gǣþ が Voyles の見解どおり IE *ǵhēti からそのまま継承されたものであるのなら、それは WGmc *gāþ からまず POE *gǣþ を経て、前母音 ǣ の影響による g [g] の ġ [j] への硬口蓋化、次にこの [j] の影響による前母音 ǣ の二重母音化により、*gǣþ からさらに *gēap となるのが本来の規則正しい発達ではないだろうか。すなわち ǣ の前位置にもかかわらず g の硬口蓋化とそれによる ǣ > ēa の二重母音化が起こっていないのは、ǣ が ā の i-ウムラウトの結果音であったからに他ならないと考えられるのである。あるいは IE *ǵhēti が古英語に POE *gǣþ として継承され、それが *gēap となり、不定詞 gān : 3 人称単数現在 *gēap のような交替が生じたが、現在時制での類例のない異常とも言える母音と子音におけるこのような交替は許容され存続するはずもなく、強変化動詞の影響により不定詞 gān に基づき POE *gā-ip > (i-ウムラウトにより) OE gǣþ へと再編成されたという可能性も考えられるかもしれない。

他方、古高地ドイツ語の ē-形で 3 人称単数現在 gēt についてであるが、IE *ǵhēti をそのまま継承した形は OHG gāt であって gēt ではない。この場合も Voyles は Gmc *gǣþ (Voyles (1989: 37; 1992: 268) は IE ē のゲルマン

祖語における反映を本稿でも用いている一般的な表記である æ (= ē¹) ではなく ē とする解釈に基づき、*gæþ でなく *gēþ と表記している) が *gæ- > WGmc *gā- という変化に先立ち thematic 化により *gæiþ (従って Voyles では *gēiþ) となり、これが OHG gēt となったとしている。そしてこの前提に立つならば、同様に OHG gēs は *gæis (Voyles では *gēis) から来ているということになり、この 2、3 人称単数における ē が変化表全体に及んだため、不定詞にも本来形 gān と並ぶ gēn が形成されたということになる。

確かに従来 IE ēi は Gmc ē (ē²) (>OE, OS ē, OHG ē>ia, ie, ON, Go ē) となったとされてきたが、IE ēi ではなく *gæiþ (*gēiþ) におけるような thematic 化により二次的に生じた *æi (*ēi) が Gmc ē² の反映と融合したかどうかは疑わしい。もし融合したのであれば、gēt と並んで *giat, *giet という例も現れて当然と思われるのであるが、そうした例はまったく見られないことから、Mottausch (1997: 254) は、古高地ドイツ語の ē- 形の起源は Gmc *gai- に基づく希求法にあるとしている。そして OE gān についてもまた Mottausch (1997: 254) はもちろん、すでに Flasdieck (1937: 60)、Brunner (1960-2², II: 281) も Gmc *gai- に基づくものであるとしている。

すなわち 'go' の短形は Gmc *gæ- (<IE *ghē-) と Gmc *gai- の両方の様相を呈しているかのように見えるのであるが、後者の *gai- はどのような過程を経て形成されたと見るべきだろうか。

3. Mottausch の理論を中心に

Schmidt (1984: 212f.) は、OE gān は Gmc ai を含有するものであり、これは *gai-an > *ga-an という音過程の結果であり、さらに Voyles (1992: 268) による解釈とはもちろん大きく異なり、2、3 人称単数の OE gæs, gæþ と並ぶ gās, gāþ は *gai- + -s, -þ、すなわち i-ウムラウトを引き起こす語幹形成母音 i のない athematic な形態に由来するとしている。しかし 2、3 人称単数は thematic な形態も成していたのであり、i-ウムラウトの欠如は当然 2、3 人称単数以外の形への類推による均一化の結果とも解せるであろう。Schmidt (1984: 214) は 'go' の短形に *gai- を推定する根拠として、これが自動詞であることから他動詞かつ e- 階梯である Skt jahāmi 'ich verlasse' の ya- 受動態で自動詞の Skt hīyate (<IE *ghH₁-je/o-) と同根かつ同じゼロ階梯という点で同一視すべきものと考えられるとして、IE *ghH₁-je/o- が *H₁j- > *əj- > Gmc *-aj- (Skt -iy-) という音法則により Gmc *gai-an-、そしてそこから OE gān となったとしている。

これに対し Mottausch (1997) は *gai- についてはあくまでも希求法を前提とする解釈を試みており、受動態の Skt hīyate と同一するのは意味の上で問題であるとして、受動態ではなく中間態 (Medium) にその起源を求めている。

Mottausch (1997: 258ff.) はまず他動詞で能動態の直説法現在 1 人称単数 *ghigheH₁mi (Skt jahāmi)、1 人称複数 *ghighH₁me (Skt jahimāḥ)、希求法現在 1 人称単数 *ghighH₁jeH₁m (Skt jahyām)、1 人称複数 *ghighH₁iH₁me という形をもとに *gai- の成立過程を以下のように説明している (Mottausch の表記による希求法現在 1 人称単数 *ghighjeH₁m、1 人称複数 *ghighiH₁me は誤りと思われる)。

ゲルマン祖語では現在時制における重複 (reduplication) が早くに放棄され、直説法では e- 階梯とゼロ階梯の交替形のうち e- 階梯 (*gheH₁- >) *gæ- が一般化された。希求法では語根はすべてゼロ階梯であったが、単数は e- 階梯の接辞を有する *ghH₁jeH₁-、複数ではゼロ階梯の接辞を有する *ghH₁iH₁- であった。そしてこの *ghH₁jeH₁- / *ghH₁iH₁- という交替は音変化の結果 *ghajē-/ghī- という交替となった。またゲルマン祖語では希求法は接辞がゼロ階梯である短い形を一般化するのが普通であったが、*bherai- (<*bheroiH₁-) 型の thematic な希求法の影響で *gha-jē- から *ghaj-ē- への異分析 (Metanalyse) が起こったために形態上の理由付けのなくなった ē は排除され、

そして同じく形態上の理由付けが不明確となった *ghi- も排除され、希求法では *ghai- > *gai- が一般化されたという。そしてそこへ不定詞の athematic な接辞 -n が付加された結果が OE gān ということになる。

次に直説法現在において一般化されていたというかつての e-階梯の反映とされる *gæ- に移ることにする。この *gæ- のもととなったとされる *gheH₁- はまさに他動詞の Skt jahāmi ‘ich verlasse (私は～を後にする、～を見捨てる)’ に見られるものであるが、ゲルマン語派では意味的には完全に自動詞 ‘weggehen (立ち去る)’ となっているという点異なる。Mottausch によると、それはこの動詞がかつては中間態であったことのなごりであるという。従って語根の母音度ももともとはゼロ階梯であったということになる。そしてこの存在していたかもしれないもとの能動態が形態の点で中間態に影響を与えた結果、中間態の形態が能動態化し、のちにもとの能動態そのものが消失したのではないかという。

現に印欧祖語の後期の段階では中間態や受動態の形態が能動態のそれに移行して能動態の接辞を有するようになるケースもあり、また中間態や受動態の接辞を有しながらも意味は能動態であるような動詞、すなわちギリシア語とラテン語に見られるような異態動詞 (Deponentien) も存在した。そこで Mottausch は、自動詞 *gæ- はゲルマン祖語においてもとの e-階梯の他動詞である能動態が早々に欠如していたため、中間態の形しか存在しなくなった異態動詞に由来すると考える。

ゲルマン語派において同じくかつての異態動詞がその意味を維持しながらも能動態の接辞を有するようになったと考えられる他の例として、Mottausch (1997: 262) は次のものを挙げている: Skt nasate ‘gestellt sich zu (～に加わる)、vereinigt sich mit (～と一体になる)’、Gk neomai ‘ich kehre heim (帰宅する)’ — Gmc *nes-a- (OE genesan, Go ganisan ‘überstehen (切り抜ける)、gerettet werden (救われる)’); Skt vartati ‘dreht (回転させる)’、中間態 vartate ‘dreht sich (回転する)、verläuft (移動する)’ — Gmc *werb-a- (OE weorþan, Go wairþan ‘werden, entstehen (なる、生じる)’)。

すなわち *gæ- ‘weggehen (立ち去る)’ についても同様の成立過程が考えられるという。そして Mottausch (1997: 262) は *gæ- への出発点を次のように考える。

印欧祖語におけるこの元来 athematic な動詞の中間態では、ゲルマン祖語の段階になると、語根は *ghighH₁toi ‘geht weg’ のような直説法、そして希求法も中間態本来のゼロ階梯から単数では e-階梯、単数以外 (複数と両数) ではゼロ階梯という能動態型に取って代わられたという: 直説法 *ghighH₁- → 単数 *ghigheH₁-、単数以外 *ghighH₁- (> *ghighē- : *ghigha-); 希求法 *ghighH₁iH₁- (Mottausch の *ghighiH₁- は誤りと思われる) → 単数 *ghighH₁-jeH₁-、単数以外 *ghighH₁iH₁- (> *ghighajē- : *ghighī-)。そして直説法では能動態の場合と同じく e-階梯に由来する *ghē- が、希求法でも能動態の場合と同じく *ghajē- から *ghai- を経て *gai- が一般化されたという。さらに現在時制における重複 (reduplication) が失われ、異態動詞という範疇も放棄され、北・西ゲルマン語では中間態という範疇も失われた。こうしてかつての中間態で3人称単数 *ghighH₁toi ‘geht weg’ は異態動詞 *ghētoi > *gæþai としていったんは生き延びたのち、能動態形 Gmc *gæþi へと転換され、そしてこれがそのまま継承された結果がまさに OHG gāt であるという。すなわち Gmc *gæ- のもととなったのがこの Gmc *gæþi であり、さらにこの *gæ- が NWGmc *gā- となり、そこへ不定詞の athematic な接辞 -n が加わった結果、NWGmc *gān > OS, OHG gān, ON gá となったということになる。

ただし古高地ドイツ語については1つ疑問が残る。それは OHG gēn における ē である。OHG gē- は *gai- に由来するとされるが、*gai- は OHG gē- ではなく *gei- となるのが本来の発達ではないだろうか。にもかかわらず gē- となっているのはなぜであろうか。Mottausch はその発生源を希求法に求めている。Mottausch (1997: 255, 267)

は、希求法 1、3 人称単数ですでに子音語尾が消失していたために完全な末尾に位置するようになった Gmc ai が ei ではなく ē となった結果、いったんは希求法の 1、2、3 人称単数は gē、*geis、gē、1、2、3 人称複数は *geim、*geit、*gein、すなわち ē ~ ei という奇異な交替が発生したが、のちに ē が一般化されたことでこの奇異な交替が排除されたため gē、gēs、gē、gēn、gēt、gēn となったのではないかとしている。しかしこの変化表内では数の上では明らかに ei が優勢であるにもかかわらず、ei が一般化されなかったのはなぜなのかという新たな疑問が生じる。このさらなる疑問に対し、1つの可能性として Mottausch (1997: 255f.) は、語根後位置で無強勢音節であったためにその希求法の接辞母音 Gmc *-ai- が 1、3 人称単数でのちに -e に短音化されている以外はすべて ē- となっている強変化動詞と弱変化動詞 1、3 類の希求法の影響も考えられるとしている。

Müller (2007: 261f.) も同様の見解を示しており、さらに Müller が指摘するように、OHG gēn は現在時制においては弱変化動詞 3 類 habēn 'have' と融合したとも解せるのであり、このように gēn の 3 人称単数 gēt の ē が前述のように IE ēi の反映と一致するとされる Gmc ē とは異なる母音であったとすれば、Gmc ē の後期の発達を示す *giat、*giet のような形が存在しないのも当然ということになるであろう。

Mottausch は希求法が *gai- + 子音語尾 (IE *-m、*-s、*-t、*-me、*-te、*-nt の反映) で形成されていたという前提に立っているようであるが、希求法は本来 *gai- + 子音語尾の間に、thematic であれば Gmc *-ai- を、athematic であれば Gmc *-i- を有していたはずである (OHG berēs, Go bairais 'carry', OHG sīs 'be')。にもかかわらず、それらを有していた痕跡が見られないことから、それらが何らかの原因により排除されたために、あたかも母音なしの接辞を反映しているかのような形態の OHG gē(C) となったのかもしれない。その考えられる原因として、語幹形成母音 i/a が見られない完全に athematic な形態を成す直説法の OHG gēC が逆に希求法の形態に影響を与えたのではないだろうか。

では 'go' では ei ではなく予想に反し ē を有するのはなぜであろうか。上述の強変化動詞や弱変化動詞 1、3 類の希求法の影響とは別の原因を考えてみたい。

強勢を有する Gmc ai は OHG ei、ē となったが、ē となったのは r、w、(Gmc h>) h の前位置と末尾であり、それ以外の環境では ei となった。従って 'go' の不定詞が音韻法則的に OE gān に一致する athematic な形態 *gain を継承するものであるならば、それは OHG gēn ではなく *gein となるのが本来の発達であろう。gēn となった考えられる原因として、*gai- と不定詞の athematic な接辞 -n との間に (そして不定詞以外の現在形においてもまったく同様に *gai- と athematic な子音接辞との間に)、Voyles (1989, 1992) が多くの局面でよく提案している語中形態素境界 (word-internal morpheme boundary) が存在し、この境界の前位置では強勢を有する Gmc ai が OHG ei ではなく ē となったためとも解せるのかもしれない。逆に Gmc ai の音変化において表面上は *gain と同一の環境下に見える、例えば Gmc *stainaz 'stone' (Go stains) > WGmc *stain が OHG stein (OE stān, OS stēn) となったのは、語中にもともとそのような境界が存在しなかったからではないだろうか。

なお、二重母音 ei を有する直説法 2、3 人称単数の geist、geit についてであるが、この ei はもちろん Gmc ai に由来するものではなく、本来の athematic な形態に 2、3 人称単数としての語幹形成母音 i が二次的に付加された thematic 化による gēst > *gēist > geist、gēt > *gēit > geit という音過程の結果であったと考えられる。

4. *gaja- > *ga'a- > *gā-、*gaji- > *ga'i- > *gai- とする見方

Mottausch の理論に続いては、前記 3 で触れた Schmidt の提案する IE *H₁j- > *-aj- > Gmc *-aj- という音過程に基づく Gmc *gajan- という形を前提とする解釈について述べておきたい。

Schmidt と同様の解釈を行なっているのが、Þórhallsdóttir (1993: 35)、Ringe (2006: 264)、Müller (2007: 260f.)、Ringe & Taylor (2014: 370f.) である。なお、Ringe & Taylor の見解について後記6で詳しく取り上げることにする。

Þórhallsdóttir は 'go' の短形はゼロ階梯の -je/o- 現在 IE *ǵhH₁-je/o- に由来するとしている。そして不定詞 *gajan- は IE *ǵhH₁-jo- に由来し、*gajan- が母音間の *j の消失により *ga'an となり、それが OE gān (OS, OHG, OFris gān, ON gá) となったのに対し、2、3人称単数現在のもとになったのが IE *ǵhH₁-je- であり、これが *gaji- > *gai- を経て OHG gē- となり、そこからさらに OHG gēn という不定詞が誕生したという。もちろんそれは *gai- から gē- への中間段階としての *gai- を前提としてのことであろうが、Gmc ai が ei ではなく ē となっている原因については Þórhallsdóttir、Ringe、Müller は何も述べてはいない。

5. Hogg & Fulk の理論を中心に

OE gān を Voyles と同様 Gmc *gǣ- から導き出そうとしているのが Hogg & Fulk (2011: 318) であり、それは athematic な形態 *gǣn だったのであり、*gǣn から gān, gǣst, gǣþ が生じたのは OE dōn 'do' とその2、3人称単数現在 dēst, dēþ の成立と同様のプロセスによるとしている。すなわち gān についての解釈の前提となるのが dōn であるという。

OE dōn は Gk tithēmi 'I put' <IE *dheH₁- に対応し、その o- 階梯である *dhoH₁- を反映する athematic な形態に由来する。このことは特にアングリヤ方言における1人称単数 dōm (OE -m <IE *-mi) から裏付けられるであろう。Hogg & Fulk は2、3人称単数における i-ウムラウトは、OE is (<IE *esti) のケースとは異なり、次の6で取り上げる Ringe & Taylor (2014) が主張する athematic な IE *-si, *-ti における末尾の i ではなく、のちにこれらに取って代わった thematic な *-ist, *-ip (<IE *-esi, *-eti) における語幹形成母音 i に起因するとしている。そして1人称単数の IE *-mi における i もまた i-ウムラウトを引き起こすことはなかったのであり、これは athematic な IE *-si, *-ti における末尾の i と同様 i-ウムラウトの時期にはすでに消失していたためであると考えられる。にもかかわらず、dōn において2、3人称単数のみが i-ウムラウトを示すことになったのは、Hogg & Fulk (314) が主張するように、強変化動詞から類推的に thematic な *-ist, *-ip が導入されたためではないだろうか。

さらに dōn については、不定詞の接辞に当たる部分が -an ではなく -n であることから、athematic な形態をそのまま反映しているようにも思える一方、Hogg & Fulk (2011: 315) は、thematic 化された形態 WGmc *dō-an を推定し、ō が母音前位置で短音化されて *do-an となったのであり、この *do-an の段階では [o] はまだ /u/ の異音であったとしている。確かに IE o は Gmc a となったためにゲルマン祖語では o が欠如していたのであり、のちに北・西ゲルマン語では u の a-ウムラウトによって o が生じることになる。そして o がまだ独立した音素ではなく、u の a-ウムラウトによる異音に過ぎなかったこの段階での ō の短音化の結果は u であったという。そしてこのことを裏付ける根拠となるかもしれないのが、同様の短音化の結果と考えられる韻律的に短い u を有する古高地ドイツ語の Otfred における2、3人称単数現在 duis(t), duit であるという。すなわち OE dōn は *dō-an > *du-an > *do-an > dōn という音過程の結果であるということになる。

これと同様の過程を Hogg & Fulk は gān, gǣst, gǣþ にも仮定している。まず不定詞 gān の場合、もし athematic な *gǣn に由来するのであれば、そしてこれがそのまま古英語形として発達していたのであれば、これは前述のように OE *gōn となってしまうのではないだろうか。Hogg & Fulk (2011: 318) は athematic な *dōn が thematic 化により *dō-an、そして短音化により *do-an となったのと同様に、*gǣn は thematic 化により *gǣ-an、

そして短音化により *gæ-an となったとしている。それではこの *gæ-an がどのような音変化を経て gān となったというのであろうか。そこで Hogg & Fulk は2つの可能性を考える。第一には、もし æ の短音化が AFB (Anglo-Frisian Brightening、アングロ・フリジア明音化) という WGmc a>OE æ の音変化に先立って起こっていたならば、短音化による結果は æ ではなく a であったのではないかという。すなわち AFB が起こる以前の段階では æ はまだ存在せず、æ に最も近い既存の融合すべき対象となるのは a であったと考えられるため、*gæ-an は æ の短音化と既存の a との融合により *ga-an、そして OE gān となったという。そうであったとすればさらに2、3人称単数 gæst、gæþ の場合、*gæ-i (*gæ-ist、*gæ-ip) > (æ の短音化と既存の a との融合により) *ga-i > *gai > *gā- という音過程によって不定詞 gān と同一の母音を有することとなり、さらに強変化動詞の影響で再び thematic 化されて *gā-ist、*gā-ip となった結果、i-ウムラウトにより gæst、gæþ となったと解釈できるかしのれない。そして第二には、逆にもし短音化が AFB 後であった場合、短音化による *gæ-an において æ が次音節の a の影響で a となったとも考えられるのであるが、結果は同じく (*gæ-an>*gæ-an>*ga-an) OE gān ということになる。しかし Hogg & Fulk (2011: 318) はこの場合、次音節の a の影響によって æ が a となる環境にはなかった2、3人称単数 *gæ-i は短音化により *gæ-i となり、さらにこの途切れがやがて解消され縮合が起これると、*gæ-i は *gē- となってしまおうとしている。もちろんこれは æ>e の i-ウムラウトを前提としてのことであろう。そしてこの場合、より正確にさらに g の [j] への硬口蓋化とその [j] の影響による二重母音化も考慮すべきであり、その本来の発達形としては *giest、*gieþ となってしまおうことが考えられるであろう。結局 gæst、gæþ を説明する上では Hogg & Fulk は短音化が AFB に先立つとする前者の解釈が望ましいとしている。

現在時制において gān と dōn の現在形の成り立ちを完全に一致してとらえるのであれば、dēst、dēþ は、実証例はないがかつては実在していたかもしれない、母音前位置での ö の短音化を反映する POE *du-ist、*du-ip (> OE *dyst、*dyp) のような形ではなく、単純に不定詞 dōn に基づく *dō-ist、*dō-ip を反映すると考えられるのと同様、gæst、gæþ は gā- の成立過程の如何にかかわらず単純に不定詞 gān に基づく *gā-ist、*gā-ip の反映と見なすことも可能であろう。

dēst、dēþ に至るもう1つのプロセスとしては、西ゲルマン語では u>o の a-ウムラウト以前のまだ音素としての o が存在していなかった段階では、thematic 化による *dō-ist、*dō-ip において ö が母音前位置で音素 /u/ へと短音化された結果、いったんは古高地ドイツ語の Otfrid の場合のように *du-ist、*du-ip となったが、/u/> [o] の a-ウムラウトと [o] の音素化が起これると、*du-ist、*du-ip は不定詞 *do-an の影響で *do-ist、*do-ip となり、さらに o の i-ウムラウト、途切れの解消、そして縮合により dēst、dēþ となった可能性も否定できないかもしれない。

いずれにしても、gān と gæst、gæþ との関係は、母音に関しては dōn と dēst、dēþ との関係に等しいという結果となっている。

6. Ringe & Taylor の理論を中心に

Ringe & Taylor (2014) は母音前位置での短音化を前提とする Hogg & Fulk の見解には懐疑的であり、Þórhallsdóttir の見解を踏まえた上で pre-Gmc *gaji- ~ *gaja- > Gmc *gai- ~ *gā- を出発点として gān の現在形を導き出そうとしている。

Ringe & Taylor (2014: 370f.) の図示する不定詞 gān とその直説法1、2、3人称単数と3人称複数、希求法3人称単数と複数の成立過程をまとめると次のようになるであろう (なお、本稿では有史以前の古英語を意味する

POE (=Proto-Old English) という表記を加えた)。

不定詞: pre-Gmc *gajana>Gmc *gāna>WGmc *gān (OS, OHG gān) >POE *gān→*gāan>OE gān

直説法 1 人称単数: pre-Gmc *gajō>Gmc *gaō (*gō?) >WGmc *gau>POE *gēa→*gāu>OE gā

直説法 2 人称単数: pre-Gmc *gajisi>Gmc *gaisi>WGmc *gaisi>POE *gāsi>*gāsi>OE gæs

直説法 3 人称単数: pre-Gmc *gajipi>Gmc *gaiþi>WGmc *gaiþi>POE *gāþi>*gāþi>OE gæþ

直説法 3 人称複数: pre-Gmc *gajanþi>Gmc *gānþi>WGmc *gānþi>POE *gāþi→*gāþ>OE gāþ

希求法 3 人称単数: pre-Gmc *gajai>Gmc *gāi>WGmc ?→POE *gāe?>*gāæ>OE gā

希求法 3 人称複数: pre-Gmc *gajain>Gmc *gāin>WGmc ?→POE *gāen?>*gāæn>OE gān

そしてこの Ringe & Taylor の提案について問題点も含め、さらに詳細に論じていくことにしたい。

不定詞が, Hogg & Fulk の提案する *gāen (Ringe & Taylor 式に表記すると *gāena) を前提とした場合と結局は同じ結果である WGmc *gān であったなら、POE *gān を経て OE *gōn となるのが本来の発達であると考えられることから、語形変化上での類推と thematic 化により、*gā- + 強変化動詞の接辞 -an と再解釈された結果 OE gān となったということになる。従って OE gān が OS, OHG gān, OSwed, ODan gā と同じく *gajan の直接の反映とする Þórhallsdóttir (1993: 37) の見解は受け入れられない。

直説法 1 人称単数が Gmc *gaō あるいは *gō を継承するものでないことは明らかであり、(Gmc *gaō>) WGmc *gau であったなら、WGmc au>OE ēa の影響で g は硬口蓋化により ġ となった結果 *gēa となってしまう、gān の変化形としてはとうてい受け入れ難いものであったと考えられる。従って、同じくこの場合も *gāu、すなわち *gā- + 接辞 *-u と再解釈され、*gā- と *-u の縮合の結果 OE gā となったということになる。あるいは *gā- と縮合した接辞は直説法 1 人称単数本来の *-u ではなく、強変化動詞と弱変化動詞においてははっきり確認できる接辞で希求法から借用されたとされる -æ (>-e)、または Ringe & Taylor (371) の表記による、そのより早期の *-æ であった可能性もある。

直説法 2、3 人称単数について、Ringe & Taylor はそれぞれ *gāsi、*gāþi が i-ウムラウトと末尾の i の消失により gæs、gæþ となったとしているが、i-ウムラウトを引き起こしたのは *-si、*þi の末尾の i ではなく、前記 5 でも述べたように、二次的に導入されたと思われる thematic な *-is、*iþ における語幹形成母音 i であったと考えられるのである。

同様のことは dōn の現在時制についても言えるであろう。Ringe & Taylor (369) が主張するように、dōn のゲルマン祖語における直説法 1、2、3 人称単数の最古の形としては確かに *dōmi、*dōsi、*dōþi が考えられるのであり、さらにこれらが i-ウムラウトにより OE *dēm (非実証形)、dest (実証形)、deþ (実証形) となるという音過程も考えられるのであり、しかも Gmc *fōti 'foot' (与格単数) >OE fet のような例から見ても、確かにこの音過程は理論的には十分に考えられるものではあるが、1 人称単数の場合は弱変化動詞 1 類の命令法単数 dēm 'judge' (<*dōmi) とまったく同一ということになってしまう。Ringe & Taylor (369) は dōn については gān のケースのようなプロセスの詳細な図式化は試みてはいないが、強変化動詞の一般的なパターンに従った再編がなされ、直説法 2、3 人称単数にのみ i-ウムラウトの結果が見られるという強変化動詞の一般的なパターンに従った再編がなされたとしている。

直説法 3 人称複数が Ringe & Taylor の仮定するような WGmc *gānþi>POE *gāþi であったとすれば、それは *gōþi となり、さらに i-ウムラウトにより *gēþ となるのが本来の規則的な発達であると考えられるが、Ringe & Taylor は thematic 化によって *gā- + *āþ (<*-anþi) となり、結局それは OE gāþ となったとしている。もちろんこれ

は *þi の末尾の i が 2、3 人称単数の *-si、*þi のそれよりも早くに、すなわち i-ウムラウトに先立って消失していたということを前提としてのことである。

しかし希求法についての Ringe & Taylor の記述には疑問な点がある。pre-Gmc *gajai、*gajain がそれぞれいったん Gmc *gāi、*gāin となったのであれば、それらはのちに *gai、*gain となり、そのまま OE gā、gān となったという可能性も否定できないであろう。さらに Ringe & Taylor が OE gā、gān に至る中間段階として挙げている、希求法の接辞母音 (*-ai- >) -ē- が再付加された形である *gaeʔ、*gaēnʔ > *gāæ、*gāæn についてであるが、希求法の接辞母音 (*-ai- >) *ē- の根拠としては OHG -ē- が考えられるのであり、さらに次の発達段階である *gāæ、*gāæn の接辞母音 *-æ- を裏付けるものとしては、EOE -æ- (>OE -e-) が希求法の接辞母音として実証されていることも確かである。Gmc *gāi、*gāin と *gāæ、*gāæn との中間段階にさらに *-æ、*-æn の前段階 *ē、*ēn を有する形を考えるべきかどうかはともかく、*gā- に希求法の接辞が再付加された形である *gāæ、*gāæn が OE gā、gān となったと考えられる。

7. gān と sāwan、dōn と grōwan

OE gān についての論述を終えるに当たり、最後に指摘しておきたい疑問点がある。それは Hogg & Fulk が thematic 化された形である *gā-an、*dō-an を前提としている点である。すなわち、もし *gā-an、*dō-an という前段階があったのであれば、強変化動詞 7 類でやはりこれとまったく同じ前段階を有していたと考えられる、例えば *sā-an ‘sow’ (Go saian、ON sá)、*grō-an ‘grow’ (ON gróa) が語根と接辞母音との間の途切れを解消するために w を挿入することにより、OE sāwan、grōwan となっているにもかかわらず、*gā-an、*dō-an が OE *gāwan、*dōwan とはなっていないのはなぜなのか、また逆に sā-an、*grō-an が Hogg & Fulk の主張する音過程に沿った形の OE *sān、*grōn とはなっていないのはなぜなのかという疑問が生じる。なお Ringe & Taylor (369) によると、古英語のマーシア方言には thematic な接辞が復活あるいは表面化したような dōan という形も存在した。

*gā-an、あるいは Ringe & Taylor が前段階として提案する類推的に thematic 化された形 *gāan が *gāwan のような thematic な接辞 -an をストレートに示す形ではなく、athematic な形を思わせるような gān となっているのは、WGmc *gān から *gāan への thematic 化を伴う再編の時期にはすでに強変化動詞 7 類で sāwan のような -æ-an 由来のものに起こった w の挿入という音過程が終了していたために結局 *gāan は *gāwan とはならず、縮合により gān となったのかもしれない。そして同じくこうした関係を示しているのが、dōn と強変化動詞 7 類で grōwan のような -ō-an 由来のものではないだろうか。

8. 結語

‘go’ を意味する古英語の動詞として長形 gangan と並ぶ短形 gān は同族の OS、OHG gān、ON gā と同じく長母音 ā を有するが、このことがかえてこの動詞の成り立ちについての解釈を極めて困難なものにしているのは明らかである。すなわち OE ā は Gmc ai に対応し、OS、OHG、ON ā は Gmc æ に対応するのが大原則である。そこでこれらの語形に対し、Þórhallsdóttir と幾人かの学者が IE *ǵheH₁- のゼロ階梯に基づく *ǵhH₁-je/o- という形を推定し、*ǵhH₁-jo- からは *gaja- が発達し、Þórhallsdóttir は母音間の j の消失により *ga’a-、そしてさらに *gā- となり、ここから ā を有するすべての北・西ゲルマン語形を導き出そうとしており、そして同様に *ǵhH₁-je- からは *gaji- が発達し、そこから *gali-、そして *gai- を経て OHG gē- (gēs、gēt) となり、この ē に基づく不定詞が gān と並ぶ gēn であるとしている。しかし *gajan > *ga’an から一律にすべての北・西ゲルマン語の gān となった

とする Þórhallsdóttir の解釈は容認できるものではない。すなわち (Gmc $\text{æ} >$) NWGmc ā は WGmc ā となるが、さらに古英語では æ 、そして 'go' の短形でのような鼻音 n の前では ō 、すなわち OE gān ではなく * gōn となることが予想されるであろう (同じことは古フリジア語についても言えるであろう)。従って Þórhallsdóttir のこの解釈がそのまま当てはまるとすれば、それは古サクソン語、古高地ドイツ語、古ノルド語の場合のみであろう。

しかし * $\text{ghH}_1\text{-je/o}$ 、* gaja- 、* gaji- が実在したという証拠はなく、あくまでもこれらはゲルマン諸語における 'go' という同根語どうしでありながら、その母音 ā 、 ē の容易には説明のつかない成り立ちを一律に説明するための出発点、通過点としての推定形である。この * gaja- 、* gaji- を大前提とするのであれば、* gaja- 、* gaji- そのものはもちろん、* $\text{gaja-} > * gā- 、* $\text{gaji-} > * gai- という音過程そのものを改めて検証し、あるいは問い直すことも必要かもしれない。すなわちその j が存続し、しかもその j によるウムラウトが起こっている Gmc $\text{auj-} > \text{POE } \text{ēaj-} > \text{OE } \text{īej-} > \text{ij-}$ (OE frīgea , OS frīo , Go frauja 'lord'), Gmc $\text{aij-} > \text{POE } \text{āj-} > \text{OE } \text{æj-}$ (OE æg , OS, OHG ei 'egg') などとは異なり、* gaja- 、* gaji- では j はウムラウトを起こすことはなく、この j 自体も何の痕跡も残さずに消失するという新たな音韻法則が前提として求められることになるであろうし、またそれを証明することが必要であろう。$$

他方、'go' における OE ā と OS, OHG, ON ā は明らかに起源が異なるという従来の見方を主張するのが Flasdieck, Brunner, Mottausch である。Mottausch は異態動詞という前提に基づく独自の理論により、あくまでも OE gān は Gmc * gai- に、OS, OHG gān , ON gā は Gmc * gā- に由来するという前提に立ち、さまざまな難問に直面しながらも、Gmc * gai- 、* gā- の印欧祖語における究極の起源についての提案も試みている点は注目すべきものと思われるが、その提案に行きつくプロセスについては必ずしも支持を得られているとは言い難い。また本稿のメインテーマとは言えないが、Gmc * gai- の根拠とされるものとしては OE gān のほか OHG gēn についても若干論じてみたが、通常予想される ei ではなく ē が現れるという疑問点については解明されているとは言い難い状況であることは少なくとも確認できたのではないだろうか。

Voyles, Hogg & Fulk は Gmc * gā- という大前提に立ち、古英語形を導き出すための詳細な音過程を提案している。しかし 3 人称単数 OE gæþ についての Voyles の解釈が容認できるものでないことは明らかである。Hogg & Fulk は印欧祖語に推定される athematic な形態がゲルマン祖語において thematic 化されたという前提に立ち、OE dōn の現在形と同じ音過程によって OE gān を導き出そうとしているが、ここでもやはり困難に直面しており、Ringe & Taylor は Hogg & Fulk の見解には懐疑的である。Hogg & Fulk のようにもし * gā-an を前提とするのであれば、これとまったく同じ形態構造を成していたと考えられる * sā-an (> sāwan) のような強変化動詞 7 類と同じ形態構造の古英語形という結果とはなっていない理由を説明すべきであろう。

さらに Ringe & Taylor は改めて Þórhallsdóttir の理論に基づき、* gaja- と * gaji- から古英語形を導き出そうとしているが、さらに不定詞と直説法複数については Þórhallsdóttir の理論には欠けていた音過程を考慮に入れた提案となっている点は注目すべきであろう。しかし 2、3 人称単数 gæst 、 gæþ の i-ウムラウトの原因が * -is 、* -ip ではなく * -si 、* -pi にあったとする解釈については疑問が残る。

以上のように、多くの学者が OE gān についての解釈を試みてきたが、残念ながら解明に至っているとは言い難い状況であると言わざるを得ないであろう。

[参考文献]

- Braune, W. & E. A. Ebbinghaus. 1989¹⁵. *Abriß der althochdeutschen Grammatik*. Tübingen: Niemeyer.
 Braune, W. & H. Eggers. 1987¹⁴. *Althochdeutsche Grammatik*. Tübingen: Niemeyer.

- Brunner, K. 1960-2². *Die englische Sprache: ihre geschichtliche Entwicklung*. 2 vols. Tübingen: Niemeyer.
- Campbell, A. 1959. *Old English grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Flasdieck, H. M. 1937. "Ae. *dōn* und *zān*." *Anglia* 61, 43-64.
- Hogg, R. M. & R. D. Fulk. 2011. *A grammar of Old English. Volume 2: Morphology*. Oxford: Wiley-Blackwell.
- Holthausen, F. 1974³. *Altenglisches etymologisches Wörterbuch*. Heidelberg: Winter.
- Mottausch, K.-H. 1997. "Germanisch **gæ-/gai-* "gehen". " *HS* 110, 252-271.
- Müller, S. 2007. *Zum Germanischen aus laryngaltheoretischer Sicht. Mit einer Einführung in die Grundlagen der Laryngaltheorie*. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Ringe, D. 2006. *From Proto-Indo-European to Proto-Germanic: a linguistic history of English, vol. I*. Oxford: Oxford University Press.
- Ringe, D. & Taylor, A. 2014. *The development of Old English: a linguistic history of English, vol. II*. Oxford: Oxford University Press.
- Schmidt, G. 1984. "Got. *standan, gaggan, iddja*." *Sprachwissenschaft* 9, 211-230.
- Seebold, E. 1970. *Vergleichendes und etymologisches Wörterbuch der germanischen starken Verben*. The Hague: Mouton.
- Þórhallsdóttir, G. 1993. *The development of intervocalic *j in Proto-Germanic*. Ph.D.dissertation, Cornell University.
- Voyles, J. B. 1989. "Laryngeals in Germanic." *American Journal of Germanic Linguistics and Literatures* 1: 17-53.
- Voyles, J. B. 1992. *Early Germanic grammar: pre-, proto-, and post-Germanic languages*. San Diego: Academic Press.
- Wright, J. & E. M. Wright. 1925³. *Old English grammar*. Oxford: Oxford University Press.